



Title	在日コリアン一世の談話におけるスタイル切り替え : スピーチレベルシフトの様式に着目して
Author(s)	前田, 理佳子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1999, 33, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

在日コリアン一世の談話における スタイル切り替え

— スピーチレベルシフトの様式に着目して —

前田 理佳子

1. はじめに

本稿は少数点在型の居住環境にある在日コリアン一世の談話資料を対象に、自然習得された第二言語としての日本語におけるスタイル面での特徴を明らかにすることを目的とする。

在日コリアンの日本語についての研究は、生越(1983)、任(1993)の意識調査をはじめとして、談話資料をもとに母語と日本語とのコード切り替えを扱った黄(1994)、大阪市生野区の在日コリアンの日本語について音声・動詞の活用体系・文末詞を分析した金(1998)、動詞文の文法的な特徴を概観した渋谷・金(1999)などがある。

在日コリアンの日本語のスタイル面について、金(1998)、渋谷・金(1999)は切り替えがほとんど見られないことを報告している。本稿は話者の生活環境や談話の場面が異なっている事例における多様な実態の一側面を報告するものである。

2. 資料について

資料は計48分間のインタビューの録音を文字化したものである。録音資料を得た経緯、話者については以下の通りである。

録音時期：1994年10月

録音場所：話者A氏宅

参加者：話者A氏

報告者（話者とは初対面、30代女性、津軽方言母語話者）

協力者（話者とは初対面、50代女性、東京方言母語話者）

話者：1906年生まれ 男性 1924年来日 慶尚南道出身

1934年から青森県北津軽郡に在住 学歴なし

（10年ほど貿易・行商等のため日本各地を旅行、その後自営業・農業）

津軽方言域に住む日本語ノンネイティブスピーカーの言語意識についてのインタビューとして協力者を介して申し込み、インタビュー進行中に目的等について説明・質問を試みたが、録音内容は言語を話題とした部分のほかに話者が話題提起するまま話してもらった経験談等の部分の両者が連続して現れたものとなっている。

3. 分析

3-1 自己訂正等に見られるスタイル調整

資料は、報告者と協力者が聞き手として参加している連続した場面から成っており、話者のもつスタイルレパートリー全体の中の限定的な一側面が示されているものとして捉えるべきであろう。よってここでは談話内のインタラクションの性質、内容の展開によって変化が現れる要素に着目し、話者A氏の当談話内でのスタイルがどのように形成されているのかを検討することとする。

話者のスタイル調整意識が現れるものとして、自己訂正に注目する。資料には自己訂正が3箇所に見られ、そのうち2箇所がスタイルを調整しようとする意識によって行われたものと考えられる。（Aは話者A氏、Rは

報告者の発話を表す。部分的に共通語訳を添える。)

(1) 2-85R:あの一、Aさんは こう、津軽弁は あんまり じゃー 使いたく ないって いう お気持ちが、あるんですか

2-86A:いや ^{それでも} んでも ない、んですよ

「んでも ない」でいったん言い切りかけたものの、ポーズの後に「んですよ」と続けることによってスピーチレベルを上げる操作が行われたものであろう。

(2) 3-53A:あの ^{あたり} あだり ^{寒く} 寒ぐ ^{ない} ね ちょうど、季節が ^{寒く} 寒ぐ ^{なかつたんですから} ながったんですから

これもやはり「寒ぐ ね」で言い切りかけたものを、過去テンスマーカーと同時に丁寧体が選択されて言い直されたものである。

また、次の部分は聞き手に直接向けられた部分とそうではない部分とが連続しており、丁寧体と常体の切り替えが見られる。

(3) 3-137A:ここ ^{本籍} ほんせぎ 書いてる、と 思うんですけど

3-138A:は一は一、そうですか

3-139A:んと、こっち、あー、ここ、本籍 ^{ないんだ} ねんだ

3-140A: ^{そうだよな} んだいな

3-141A:あー ここ、ここ 本籍 ありません

話者A氏の出身地のことが話題になった部分での、自身の名刺を手にとつて確かめながらの発話である。3-137Aの発話を受けて報告者は名刺を見て「本籍」の記載が見当たらないことを身振りで示している。3-139Aと3-140Aは小声で独り言のように発せられ、聞き手に直接向けられていない。この部分には丁寧体が用いられず、その前後の3-137A、3-138A、3-141Aには丁寧体が用いられている。

これらの自己訂正等の例から、発話末のスピーチレベルの違いが話者のスタイルを構成する要素のひとつとして存在していることがうかがわれ

る。本稿ではこのスピーチレベルの選択とシフトに着目し、談話内のどのような部分でどのようなスピーチレベルが選択されているか、どのような様式でスピーチレベルシフトが行われているかを明らかにしたい。

3-2 スピーチレベルの分類法

発話末の丁寧体の有無に着目し、スピーチレベルを以下の3つに分類する。応答詞・感動詞だけの発話及びそれに類するもの(計55)は扱わない。

＋：発話末に「です」「ます」が用いられているもの。要請の発話「てください」を含める。

－：発話末述部に「です」「ます」が用いられずに言い切られているもの。

？：述部が発話されず、ポーズがあり、発話が終了しているもの。倒置文の前半部分と後半部分との間にポーズがある場合、その後半部分。直前の発話の一部を繰り返しているもの。

3-3 スピーチレベルシフトの機能

生田・井出(1983)は、同一談話内における敬語表現のレベルの混合に着目し、敬語レベルのシフトが「話者の心的態度」を表して発話時の心的距離の調節を行う機能をもつとともに、「談話の展開」(談話ユニットのまとまりと移行)を示す機能をもっているとする。

話者A氏の談話におけるスピーチレベルの選択とシフトにはそういった機能があるのか、その機能がどのような選択とシフトによって果たされているのか、検討していくこととする。

3-3-1 話題の展開に関わるシフト

談話中で話者A氏は、報告者・協力者からの質問に直接こたえるだけで

はなく、積極的に話題を発展させたり新たな話題を提起したりしている。

(4) (どのようにして日本語を覚えたのかという問いに対して)

十 1-1A: 学校 はいった ^{こと}ごと ありません

十 1-2A: 本国でも、^{そうだし}んだし、日本でも、学校 はいった ^{こと}ごと ありません

一 1-3A: えー あたしが Bの さっきも 言ったんですけど、
^{約六十年間ちょっと以上}約六十年間 ちょっとにじょう いる とき、んー わたし
 の 甥っこね、ここ ^{連れて}連れて きて、B小学校 ^{いれた}いれた ^{こと}こと
 と あるの、ん、ん

(発話番号の前の記号はスピーチレベル。Bは話者A氏の居住地名。)

問いに対する答えとしての1-1A、1-2Aでは十レベルが用いられているが、連想された新しい話題を導入していく部分で十から一へのシフトが現れている。

(5) 1-113R: わたしの 勉強って いうのが、こう、ことばについて
 の ことを 研究してるんですよ

十 1-114A: はー あー そうですか

1-115A: ですから そういう お話を 是非 いろいろ 教えてい
 ただきたいんです

1-116A: はー、はー、はー

十 1-117A: ^{あんがいね}案外の、^{わたしだったら}わたしなら、んー B 住んで いても、んー
 韓国 毎年 行ってる ^{ことごと}ことごと、んー、ま、い、今 現在
^{うちの}いえの 子どもら、んー 商売も 大きく やってる
 しね、ほんとから いけばね、パチンコが 二十五軒だ
 ね、Cね、やってるし、えー、えー んー 案外 あの、
 この パチンコの 機械 作る かただとかね、いろいろ
 あのー パチンコ、この 家 一軒 ^{たてるのに}建てるに、いろいろの

かたが 来るんでしょ

- 十 1-118A: ああ いう かたも まいーとし ほら、何人ずつ 会って
ますので、それで ほら、ことばが ちょっと、こう、
どっちとも ^{言えないような} ことば 出ますね、ん
- 十 1-119A: 東京とか 名古屋とかね、ああ いう かたが 第一 ほら、
んー、皆 こう やっている 一類が、子どもでしよ
- 十 1-120A: ^{おやだっつたら} 親だっつーば 第一 もう、すぐ 名刺 持って きては^ま一、
ねー 挨拶して 話、ん、しますから ほら
- ー 1-121A: いや 今じゃ さっきも 言ったんですけど、日本人は
^{立派だよ} いっぱだよ、ん
- ー 1-122A: それだけは わたし 誉める
- ー 1-123A: ^{立派だよ} いっぱだよ、ん
- ー 1-124A: えー、外国[息] んー 行くと、んー いろいろだ
- ー 1-125A: ^{立派だよ} いっぱだよ、ん
- ー 1-126A: まー ^{どっちかってば} どっちかってば 日本の かた、ま 紳士だな

(Cは話者A氏一族が経営するパチンコ店グループの名。

[息]は深く息を吸い込む音を表す。)

1-113Rの報告者の要請に応じて自身のことばづかいについての内省を述べたあと、1-121Aからは日本人への評価を述べる部分に移る。質問に対する答えにとどまらず話題を発展させていく部分で、スピーチレベルを下げる操作が行われている。

これから述べようとすることを予告的に提示する表現を用いる場合には、+レベルでそれを行った後、具体的な内容を語り始める部分でダウンシフトを行い、その後は主として-レベルを用いて語り進める。

(6) (前略=話者A氏の子どもたちについての話)

? 2-44A: 三番めが 会長で、四番めが 社長で、^{わたしの} わだしの 五番め

が専務で、ん、ん、ん

2-45R:それは 頼もしいですね

2-46A:ん?

2-47R:頼もしいですね

+ 2-48A:まーまー、子どもら 一生懸命 やってますよ、ん

? 2-49A:みんな、ん

? 2-50A:みんな

+ 2-51A:ただね、ただ わたしが 一つ 大きい こと 言える こと
が、一つ ありますよ

+ 2-52A:んー、Bで 子ども、長男が、^{向こうから}向こうから、あー 亡くなっ
た妻を もらって、んー、^{向こうで}向こうで、ちょう、こう現在、
今ね、あのー ^{親戚}おやこ、が 不幸 あって、^{行きましたけど}行きましたけど
どね

? 2-53A:飛行機で

ー 2-54A:今日 飛行機で 発って、え、宇都宮まで 行ったの

+ 2-55A:んー、行ったんですけど

ー 2-56A: [息]んー これは 長男が 向こうに 行って 生まれで、
その あと 七名は 皆 ここで ^{生まれたの}生まれだの

? 2-57A:ん、Bで

ー 2-58A:^{ひとりも}ひとりでも わたしに 抵抗する 者が ^{ないの}ねーの

ー 2-59A:^{ひとこと}ひとことば ^{言えば}しゃべれば ^{はいーはいなの}はいーはいだの、ん

ー 2-60A:はいーはいだの

ー 2-61A:それ ^{ひとつなら}ひとつつだば ^{わたしが}わたしが 言える

+ 2-62A:んー、ちょっとねー、^{これは}これあ まー 一人に、^{ここは}ここあ
^{川倉でしょ}ざいでしょ

ー 2-63A:どっちが ^{親なのかしら}親だがしら、どっちが ^{子どもなのかしら}子どもだがしら、わけ

わからないような
わがらないんた ことば

- 2-64A:親が 子どもに さべる ことばも、子どもが 親に さべ
る ことばも、おんなじだ わげ、ね
- 2-65A:ことばが、いいへだ なくて、ね

2-51A でこれから話すことについての予告を行い、2-56A 以降で予告した内容を話し進めている。予告の部分では＋レベルを用い、具体的な内容にあたる部分は主として－レベルで進められる。ここでは 2-51A が発話された時点での計画が 2-52A の途中で変更され、長男の動向について触れた後、2-55A で再び 2-52A の「向こうで」に続くべき部分に復帰する。2-52A 「ちょう、こう現在、今ね」から 2-54A までは計画を変更して挿入された内容であるが、本来の話題に戻る直前の 2-55A で＋レベルを用いて内容の区切りめを表してもいる。

次の例では 3-68A の予告・提示部分に＋レベルが用いられ、直前の発話からのアップシフトが行われている。また 3-95A は経験談のうち時間的順序に従って出来事を述べる部分の前半が終了してしめくくる発話となっており、3-105A は後半部分について同様の機能をもつ発話となっているが、両発話でアップシフトが見られる。

- (7) 3-65I: たべもの 分けて くれたんですか
- 3-66A: えー
- 3-67A: あいやー くれたの くれたの
 - + 3-68A: わだしね、日本へ いて 東京おお、さっきも 言ったんですが 大森区 いて、韓国 行く ときし、そごの うち 寄りましたね、あー
 - ? 3-69A: あの、あの おばあさんがね あの 当時はね、あっちに あれば 女の かたは、こう 荷物 しょうんじやなく、こう いう 円い 籠、こう あんまり こう、こうじや ない

く、こう 開いた、ふしが それほど 高く なくね、円い
もので、そこに 紐が^{ついて} ついで、それから この、ここ 担
ぐ、棒、ふたっつ、こう

3-70I:こう

+ 3-71A:えーえー、後ろ 一つ、前 一つ、こうして 担いで 歩き
ました

+ 3-72A:その おばあさんが、あーんまり もう 腹 減って、線路
の ちょうど、今から 言えば^{路切でしようね} ふみぎりでしようね

- 3-73A:^{路切}ふみぎり わって、渡って 行く^{おばあちゃんと} おばあちゃんど、わた
しが 線路の こう^脇 脇ばら 行くと 会ったの

? 3-74A:とにかく おばあちゃん おれば 助けて けろて 今 ゆっ
た とおり、腹が 減って、どうにも ならないから

- 3-75A:こんな わたしの^{手を} 手ば はたく わけ、ん

? 3-76A:一緒に^{おいでって} あべって、いう 意味で

+ 3-77A:ん、そうして そご、んー やぐ^{時間から} 時間から あの 当時は
時計も 持って いなかったんです

- 3-78A:よく^{計ったら} 時間が 計ったに 約[息]二十分くらい 歩いたかな

? 3-79A:^{行ったら}行っただっきゃ いやーー あの 白い ごはんで、あー

? 3-80A:そしたら ごはん^{ごちそうに} ごちよになっ て 行く^{行くっつたら} っつたら
^{行くなって} 行くなっ て

? 3-81A:いろって、ね、ん

? 3-82A:いろって

- 3-83A:そして^{いたら} その 晩に いた^{いた} っきゃ おじいちゃんが 来たの

? 3-84A:いやー^{おれを} おれば^{かわいがってね} めごが^{って} っしてし

3-85A:まーまーまー[嘆息]

3-86I:いい 人に 巡り会ったんですね

- ? 3-87A: いやいやー ^{おれをね} おればね、こう ^{撫でたりね} なぜだりし[息]
- 3-88A: そうして ^{みたらね} みたつきゃや こう あとからね、三年後に、
 ことばも ^{覚えて} だいぶん 覚えで[息] 韓国 行って 帰りに、ねー
- 3-89A: ^{そこに} そごに ^降りて、^{そこに} そごに ^{訪ねて} 訪ねて ^{みたら} 行って みだけ、[息] やっ
 ぱり 子どもさんが ^{なかったもんな} なぐであったもな、えー
- ? 3-90A: 子どもさんが ^{なくて} なぐで
- ? 3-91A: わたしを ^{かわいがってね} わだしば めごがってし、あー
- ? 3-92A: ^{かわいがってね} めごがって
- ? 3-93A: えー、^{かわいがってね} めごがって
- 3-94A: まーまーまーまー
- + 3-95A: あー いう、おばあちゃんに ^{助けて} 助けで もらった こと あ
 りますよ
- 3-96A: あー ^{わたしたったら} わたしなら ^{当時なら} あの 当時だば ^{言えないな} なんともしゃえねな
- 3-97A: 一生 ^{忘れたい} 忘れね あれは
- 3-98A: えー、ああ いう ことは 絶対 忘れるべき もんじゃ
 ない、ん、ん
- ? 3-99A: まだ ^{若かったしね} わがくてあったしや
- ? 3-100A: あの ^{あたりね} あたりね、んーんー
- ? 3-101A: ^{あとから} ん あとから、三年、いまま ゆった とおり、三年後に
^{行ったら} 行ったつきゃ ことばで[息] しかし、んー、あ、ま、あ
 の 当時は 韓国じゃ ^{なく} なぐ 朝鮮
- 3-102I: 朝鮮
- 3-103A: え、え
- ? 3-104A: 朝鮮人
- + 3-105A: ^{朝鮮人と} 朝鮮人ど しては ^{珍しいって} おまえは めでらしいって、こう、[笑]

こう言っていました

3-106I: あれー^{あらー}

? 3-107A: 朝鮮人^{朝鮮人と}どしては^{珍しいって}めでらしいって

? 3-108A: [笑]おれ^{おれを}ば^{誉めてね}誉めでし

? 3-109A: めでらしいって、あーあー^{珍しいって}

([嘆息] [笑]はそれぞれ嘆息、笑いを表す。Iは協力者の発話を表す。)

3-69A、3-71A、3-72A、3-77A、3-88A は経験談の中の中核を成す出来事について話す部分に挿入されて状況や背景を説明する発話となっており、3-71A、3-72A は予告・提示の部分にひきつづいて+レベルが用いられている。3-77A も+レベルが用いられており、3-75A の-レベルから倒置法の後半部分にあたる3-76Aの?レベルの発話を介してアップシフトが見られる。

3-3-2 丁寧対策としての+レベル使用

話者A氏の全ての発話のスピーチレベルの内訳は表1の通りである。

話者A氏の86回のターンのうち、第1の発話の67.4% (58回)は+レベルとなっている(表2)。その後話者A氏がターンを維持し、+レベルが保たれた場合のもの計32発話を含めると、発話全体の+レベルのもの143発話(表1)のうち105発話(73.4%)が話者交替が起こった直後のものである。ターンの冒頭では聞き手の発話への直接的な反応が示されることが多いため、待遇意識の表現として丁寧体を選択されやすい傾向があると考えられる。

報告者・協力者の質問に対する答えの発話25例の場合、+レベルが18例、?レベルが2例、-レベルが5例となっており、各ターンの第1発話全体の割合とほぼ近い割合となっている。

報告者・協力者の発話毎のスピーチレベルは表3に示す通りであるが、

表1 全発話のスピーチレベル

スピーチレベル	発話数 (%)
+	143 (37.6)
-	111 (29.2)
?	126 (33.2)
計	380 (100.0)

表2 第1発話のスピーチレベル

スピーチレベル	発話数 (%)
+	58 (67.4)
-	11 (12.8)
?	17 (19.8)
計	86 (100.0)

表3 報告者・協力者のスピーチレベル

スピーチレベル	発話数 (%)
+	61 (53.0)
-	9 (7.8)
?	45 (39.1)
計	115 (100.0)

表4 他者発話からのSLシフト

報告者・協力者のSL → 話者A氏のSL	
+ → +	31
? → +	23
- → +	2
? → ?	5
+ → ?	4
? → -	3
+ → -	8

SL: スピーチレベル

感動詞・応答詞のみの発話以外で報告者・協力者のターンの最終発話におけるスピーチレベルと話者A氏のターンの第1発話におけるスピーチレベルは表4のような対応を見せている。

また、質問、確認要求、要請、感謝、謝罪といった聞き手志向が高い機能をもつ発話27例のスピーチレベルは、+レベルが23例、-レベルが3例、?レベルが1例となっており、ターンの中の位置に関わらず、丁寧体が用いられる割合が高い。直前の自身の発話が一レベルの場合に次の例のようなアップシフトが起こっている。

- (8) + 2-130A:昭和 十年頃からね、昭和 九年に[息]ここに-- B
来たと思います

－ 2-131A:昭和 九年の 春で ^{あったらうね} あったべね [息]

＋ 2-132A:いま 何年 なります？

2-131A でダウンシフトされたものが、聞き手への質問である 2-132A で再び＋レベルに転じている。

(9) － 3-142A:[息]この 前も ほら、大先生 来た とき、うちの お

ばあちゃんの ^墓 はが ^{見せたかった} 見せたくてあった

＋ 3-143A:まだ ^{見てないんでしょ} 見ねんでしょ

3-144A:えー、見てないです

－ 3-145A:んーんー、^墓 はが 見せたくてあった

3-146R:あの、畑の ほうに あるんですか

＋ 3-147A:えー そうです

＋ 3-148A:はだけの ^{畑の} ほうに あります

＋ 3-149A:一回 暇 あったら ^墓 はが ^{見て} 見てください

＋ 3-150A:ちょっと 見た こと ないかも ^{わかりません} わかりません

? 3-151A:あー いう 墓じゃ

確認要求の発話 (3-143A) でアップシフトが行われている。

4. まとめ

話者 A 氏の当該談話資料において、スピーチレベルの選択とシフトは、談話の展開を示す機能と丁寧対策の機能とを担うスタイル構成要素のひとつであることがわかる。

談話展開と関わるスピーチレベルの選択とシフトとして、ダウンシフトに新たな話題を導入する機能と既に＋レベルで導入された新たな話題を具体化する機能をもつものがある。アップシフト及び＋レベル使用には新たな話題を導入する機能をもつもの、経験談において具体的な出来事の背景

や状況を説明する部分への移行に伴うものがある。

ターンの冒頭や質問・確認要求・要請の発話には十レベルの発話が多く、アップシフトが見られることから、丁寧対策としての十レベル使用がみとめられる。

5. 今後の課題

談話では、常体と丁寧体という文法的文体レベルの選択と操作が行われるだけではなく、語レベルでの選択と操作も行われていると考えられる。例えば、(2)3-53A、(3)3-139A では津軽方言で「ない」を意味する語形「ね」が用いられているが、(1)2-86A では「ない」が用いられ、(3)3-141A では「ありません」が用いられており、これらが選択・操作の対象となっていることがわかる。また、(2)3-53A では、自己訂正の結果として「寒ぐねくてあった」という津軽方言形が選択されずに「寒ぐなかつた」が用いられている。(7)3-99A、(9)3-145A など「～くてあった」形が用いられている部分も存在しており、両語形が選択・操作の対象となっている可能性がある。(1)2-86A、(3)3-140A で用いられている「んだ」は「そうだ」という意味をもつ津軽方言形であるが、次のように常体の発話が続いた後に報告者の発話の直後で丁寧体が選択されると同時に「そうです」が用いられており、これらが話者A氏のスタイルレパートリーの中で対立する要素として登録されていることをうかがわせる。

(10) 3-240A: あぎたけんから ^{秋田県から} 嫁 四人 来てる

3-241A: うちへ、えー

3-242A: うちへ

3-243R: 秋田と ご縁が

3-244A: まんず ^{まーず} そうですね

3-245A: 四人 来てる

3-246A: 四人

この他、話段の内容や、話段中の発話機能によって、用いられる終助詞・間投助詞、自称詞等に異なった傾向があるがここでは触れない。

音声面では、韓国語において/k//t//c/が有声音として現れる規則が津軽方言で母音間の/k//t//c/が有声音として現れる規則と重なる部分において、有声音が現れる場合とそうではない場合とが見られる。例えば、3-137Aには「ここ」「ほんせぎ」が、3-139Aには「ほんせき」、3-141Aには「ここ」「ほんせき」が用いられている。これらが方言音と共通語音の対立としてとらえられているかどうかについては詳細な分析が必要であろう。

【参考文献】

生田少子・井出祥子「社会言語学における談話研究」『月刊言語』vol.12. no.12 (1983)

任栄哲「二言語併用社会の社会言語学的研究」『日本語学』12月号 (1992)

任栄哲『在日・在米及び韓国人の言語生活の実態』(1993)

宇佐見まゆみ「談話レベルにおける敬語使用の分析——スピーチレベル生起の条件と機能——」『平成4年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』(1992)

宇佐見まゆみ「ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」『平成10年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』(1998)

生越直樹「在日朝鮮人の言語生活」『言語生活』376 (1983)

金美善「在日コリアン一世の日本語——大阪市生野区に居住する一世の事例」『日本学報』17 (1998)

渋谷勝己「日本語学習者のスタイル切り替え——従属節の丁寧表現をめぐって——」『無差』4 (1997)

渋谷勝己「フォーマルスタイルとインフォーマルスタイルとのあいだ——中間言語のスタイルの一側面——」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』(1999)

渋谷勝己・金美善「在日コリアン一世の日本語中間言語における動詞文」『第

2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』(1999)

- 陳 文敏「台湾人日本語学習者と日本語母語話者の発話末に見られるスピーチレベルシフト」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』(1998)
- エレン・ナカミズ「日本語における切り替えの習得段階——ブラジル人就労者の例——」『阪大日本語研究』9 (1997)
- 黄 鎮杰「在日韓国人の言語行動——コード切り替えに見られた言語体系と言語運用」『日本学報』13 (1994)
- 黄 鎮杰「在日韓国人の敬語運用の一斑——日本語と韓国語の待遇規範意識のはざままで——」『阪大日本語研究』8 (1996)
- 三牧陽子「待遇レベルシフトの談話分析」『AKP紀要』3 (1989)
- 三牧陽子「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門』第42巻 第1号 (1993)
- 三牧陽子「対談におけるFTA補償戦略——待遇レベル・シフトを中心に——」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 (1997)
- メイナード・K・泉子「文体の意味——ダ体とデスマス体の混用について——」『月刊言語』vol.20.no.2. (1991)

(文学研究科助手)